

光文社文庫

長編サクセス・ロマン

野望風雲児

とよだ こうじ
豊田行二



光 文 社



光文社文庫

長編サクセス・ロマン

野望風雲児

著者 豊田 行 二

1994年1月20日 初版1刷発行

発行者 大 坪 昌 夫

印刷 大 日 本 印 刷

製本 大 日 本 製 本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13

電話 東京 03(3942)2241(代表)

振替 東京 6-115347

© Kōji Toyoda 1994

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-71822-1 Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上の例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3269-5784)にご連絡ください。

長編サクセス・ロマン

野望風雲児

『情事を盗む』改題

とよだ こうじ
豊田行二



光 文 社

目次

第一章	情事を盗む	5
第二章	淫声くらべ	31
第三章	情事の交換	63
第四章	絶頂スワップ	90
第五章	三重奏の夜	117
第六章	絶頂テレホン	144

第七章	華麗なる肉交	174
第八章	四重淫行	200
第九章	乱悦五対一	228
第十章	性学スワップ	255
第十一章	トリプルセックス	282
第十二章	性乱夫婦交換 スワッピング	309

解説 山口 香 336

*

第一章 情事を盗む

1

空には中秋の名月がかかっていた。空気は澄みきっている。しかし、外山誠一の足取りは重かった。

金曜日の夜は夫婦が睦まじく愛を語り合うことになっている。自宅では、妻の理香が、入浴をすませ、薄物のピンクのネグリジェを素肌にまとい、外山の帰りを今や遅し、と待っているはずである。

理香は外山より三歳下の三十二歳。ようやく、女の欲びをおぼえ、毎晩のように求めてくる。だが、結婚して八年にもなると、外山のほうは理香の体に飽きがきて、そうそう求めに応じるわけにはいかない。

あまりエネルギーを消費すると、仕事に差し支えるし、出世のブレーキになりかねない……。そう言って、愛妻デーは金曜の夜だけ、ということにしている。

「ねえ、三十五歳で週一回というのは少なすぎるわよ。どこかおかしいのじゃないかしら。お医者さんに診てもらったほうがいいわよ」

週一は不満らしく、理香はそう言う。

外山はとりあわない。週二回にすれば、理香は週三回を要求するに決まっている。

都心の会社から、国電で五十分。駅からバスで十分。バス停から徒歩五分。乗換え時間や待ち時間を入れると、通勤に片道一時間二十分はかかる。

一日じゅう仕事をして、一時間二十分、満員の電車とバスを乗り継いで、郊外のマイホームにたどりつくと、疲れきってしまって口をきく元気もない。

しかし、理香はそんな事情はまったく無視して、熟れた肌を押しつけてくる。

後輩に誘われて、麻雀を半チャン二回ほどつきあったので、外山がわが家へたどりついたのは、午後十時近かった。

「遅かったのね」

理香は、半分ふくれて、外山を待っていた。

「男にはつきあいというものがあるからね」

外山は背広を脱いで理香に渡し、風呂場に向かう。

「それは分かっているわ。でも、つきあいはほどほどにしないと、体をこわすわよ」

理香はそう言う。自分のおねだりが、夫の体調に及ぼす影響にまでは頭がまわらないらしい。

外山が入浴をすませ、子供部屋を覗いて、ひとり娘の明子あきこの寝顔を見て、夫婦の寝室のベッドに入ると、理香は鼻を鳴らしてすり寄ってきた。

外山は目を閉じて、脳裏に会社の美人OLのあられもない姿を思い浮かべ、どうにか可能な状態になった。

おぞなりの愛撫をし、頃合いを見はからって、体を起こし、ひとつになる。

理香は声を出し、息をはずませ、全身を痙攣けいれんさせて外山をむさぼる。

そんな理香を見ていると、激しいのは女ばかりのような気がしてくる。

子供をひとり生んだ体なのに、理香の胸は二十代といっても通用するほど若々しい。色素の沈着しにくい体質で、乳首も乳輪も、ピンク色に近い色をしている。乳首の先端は、さすがに内側に折れ込んではいないが、全体に小粒で可愛い感じがする。

ウエストもきちんとくびれ、腰のあたりは脂の乗り切った女盛りを象徴するように、大きく張り出している。

自分の妻でなければ、間違いなく外山はのぼせあがったに違いない。それほどいい女である。顔だって、美人の部類である。目は大きく、鼻筋は通っているし、唇の形だって悪くはない。ちよっぴりおでこが出ているのが、難点といえば難点だが、見方によってはそれだって可愛らしい。

しかし、大きな声を出し、のけぞって無我の境地に遊んでいる理香を見ているうちに、外山

は取り残されたような気がしてきた。そうになると、気持ちがいらいらしてくる。

それは、敏感に体に表われた。

急速に股間のものが力を失ってきたのだ。

「ねえ、どうしたの？」

理香はじれて外山を非難する。

「どうやら、中年の中折れらしい」

外山は醒めた声で言う。

「中年の中折れ？　なによ、それ」

理香は泣きそうな声だ。

「つまり、途中でダメになることさ」

「いやよ、そんなの。ちゃんとして」

「ちゃんとならないから、中折れなのさ」

「意地悪ッ」

「別に意地悪をしているつもりはない」

「いいわよ。あなたが、ちゃんとならないのなら、わたし、浮気をするから。あなた以外の男なら、喜んでわたしの相手をしてくれるわよ」

理香は大胆な言葉を口走る。

「おいおい、無茶はよせ」

外山は慌てた。ほかの男と浮気をされるのは困る。

「だったら、真面目にしてよ」

「真面目にしているつもりなんだけどなア」

「ちっとも真面目じゃないわ」

理香は唇を尖^{とが}らせた。

しかし、何と言われても、いったん戦意を失ったものは、容易に元には戻らない。

「あすの朝、明子が小学校へ行ってから頑張るから、今夜は休ませてくれないか」
遂に、外山は白旗を掲げた。

2

「お父さんだけ目玉焼きが二個なんて、ずるいわ」

明子は朝食のテーブルにつくと、外山の皿を見て文句を言った。

「半分、やるよ」

外山は皿を娘の前に押しやった。

「いけません」

厳しい声で理香が言う。

「なぜなの？ 私だって、目玉焼きを食べたいわ」

「お父さんには頑張ってもらわなければならぬの。何しろ中年の中折れですからね」
思わず理香は口をすべらす。

「なあに、中年の中折れって」

「明子には分からなくてもいいの」

「変なの」

明子はふくれたり、首をかしげたりして、食事をした。

「行ってきます」

ランドセルを背負って、玄関で靴をはく。

「頭が痛くなったり、お腹が痛くなっても、早退するんじゃないわよ」

理香はそう言って、明子を送り出す。

玄関のドアに鍵をかけ、内側からチェーンをおろすと、嬉しそうにダイニングキッチンへ戻ってくる。

やる気十分の理香を見て、外山は慌てて目玉焼きを胃袋へ押し込む。

ふと、理香を古女房だと思ふから、戦意を喪失するのではないか、と思う。

「おい、お前、結婚するときに、高校時代のセーラー服を持ってきただろう」
外山は尋ねた。

「持ってきたわよ」

「あれを着てくれないか」

「ダメよ。今のわたしの体には合わないわ」

「そこを無理して着てくれないか」

「変な人。どうしてわたしがセーラー服を着なきゃならないの」

「セーラー服を着た女を犯してみたくなった。だから、セーラー服を着て、少しばかり抵抗してくれると、中年の中折れにならずにすみそうだ」

「呆れた人。中年男って、本当に、考えることがいやらしいのね」

そう言いながらも、理香はタンスの底をひっかきまわして、高校時代のセーラー服を引っ張り出した。

それを持って、座敷のほうへ引っ込んだが、しばらくすると、セーラー服姿で現われた。

「ウェストが、やはり太くなつてて、きちんとならないの。でも、どうにか着れるみたい。どう？ わたしの高校生姿は」

スカートを両手で広げるようにして、ポーズをとる。

「頭にパーマがかかっているから、何となく不良女子高校生というところだな」

外山は理香を上から下まで眺めながら、そう言う。

初めて見る理香のセーラー服姿に、予想どおり欲望がかきたてられ、股間のものが力を持ち

はじめた。

「それじゃ、ベッドに行って、不純異性交遊とやらをやりますか」

外山は理香に近づいて、抱き寄せてキスをした。手はスカートのひだをくぐって中へのびる。スカートの下は、小さなパンティだけだった。

理香も手で、ジュニアの硬度を確かめる。

「こら。女子高校生らしく、抵抗しろ」

「だって、無理よ」

理香は甘えた声を出す。

「今朝のあなたは頼もしそう」

手は夫のものをつかんだまま、放さない。

外山は先に階段をあがり、寝室に入った。

理香も追いかけるようにあとに続く。

寝室に入ると、外山は理香をベッドに押し倒した。

スカートをまくりあげてパンティを脱がす。

逆三角形の毛足の短いくさむら叢が現われた。

見馴れた叢も、きょうは別人のものに見える。前戯はすべて省略して、外山は押し入った。

理香の内部は、前戯の必要がないほど、潤んでいた。

「凄い、違う男の人に犯されているみたい」

理香はたちまちあえぎはじめた。

外山は、本当に女子高校生を抱いている気分になった。

中折れには、なりそうもない。

女子高校生は、まもなく、本格的にあえぎはじめた。

しきりに、背中を持ちあげようとする。

クライマックスが近いときに理香がみせるしぐさだった。

しばらくすると、理香の体が震えはじめた。

震えは次第に強くなる。

それが最高点に達したとき、理香は背中でブリッジを作り、低く唸^{うな}った。
のぼりつめたのだ。

リズムカルに女心が強弱のアクセントをつけて外山をとらえる。

外山は、女心が力を使い果たす前に、動きを速め、ゴールに駆け込んだ。

「素晴らしいわ、あなた……ああ、ああ」

理香は最後の力をふりしぼって外山を賞讃し、動かなくなった。

セーラー服には、処女の匂いがかすかにこもっていた。

外山はその匂いに包まれて、眠りの淵へおちていった。

「あなたがあんなに元気になるのなら、これから、毎晩、セーラー服を着ようかしら」
ひと眠りすると、理香はさっぱりした顔で言った。

「毎晩じゃ、すぐに神通力がなくなるよ」

外山は顔色を変えて首を振る。毎晩求められたのでは、命をとられてしまう。

「そうね、たまに女子高校生の恰好をするからいいのね」

理香はあっさり納得する。外山に愛してもらって、気分がすっきりすると、理香はききわけのよい女になる。

その日の午後は、理香はミシンを踏んで、セーラー服とスカートのウエスト部分の改造に専念した。

日曜日の夜は、体にぴったりサイズを直したセーラー服で、外山を誘惑する。

外山はセーラー服の理香を押したおし、スカートをめくって、うしろから攻略した。

外山のからだは理香が満足するほど元気だった。

月曜日に入社すると、外山は、昼休みに仲のよい同僚たちと雑談したとき、セーラー服の効用について喋った。どうしても、喋らずにいられなかったのだ。

ほぼ、同年輩の同僚たちは、うらやましそうに外山を冷やかした。

「二日続けて女房を可愛がるなんて、気でも狂ったのじゃないかね」

「絶対に、うちの奴の前では、二日続けて女房を可愛がった話はしないでくれよ。うちの奴が、俺を捨てて、君に乗り換えると言い出したら、一大事だからな」

「だけど、女房にセーラー服を着せるっていうのは悪趣味だぜ。俺なんか、女房がセーラー服を着たら、吐き気を催すかもしれないよ」

口々にそんなことを言う。

みんな、妻を相手ではふり立たなくなった、という点では共通していた。

俺も女房にセーラー服を着せて試してみよう、という者はひとりもいなかった。しかし、みんなの顔に、俺も早速試してみよう、と書いてあった。

木曜の夕方、外山は藤岡専務から、すぐに専務室に来るように、という電話を受けた。

外山は受話器を置くと、首をひねった。

専務から叱られるような失敗はした覚えはない。

藤岡専務は、社長、副社長につぐ、ナンバースリーの実力者である。これまで、外山は親しく口をきいてもらったことはない。そんな場合、呼び出されるのは、叱られるときと決まっていた。

外山は、恐る恐る専務室のドアをあけた。

藤岡は予想に反して上機嫌だった。